「ワンワン。ウゥ。ワンワン。」

と、吠えたんだど。今にも、鎮守様に飛びかかろうとしたんだど。

そしたら、鎮守様はびっくり仰天逃げ出したんだど。

何しろ、今みでに、街灯がある訳でなぐ、淡い月に光はあっても、家々の軒下通路だから、足元に何があるか見極めるゆとりなんかある訳もなく、めくらめっぽうに走ったんだど。

ところが、土蔵の礎石につまずいて、のめって目の前にあった井戸の中にまっさかさまに、

「ドポーン」

と落ちっちまっただど。

ようやく、井戸からはいあがった鎮守様は、ずぶぬれになり、裸足のままで社に帰っただど。

冷え切った体を、暖めようと、こたつに入りながら、

「いまいましい犬め、それに、土蔵がなければ……。井戸もだ。大体、井戸があるから、